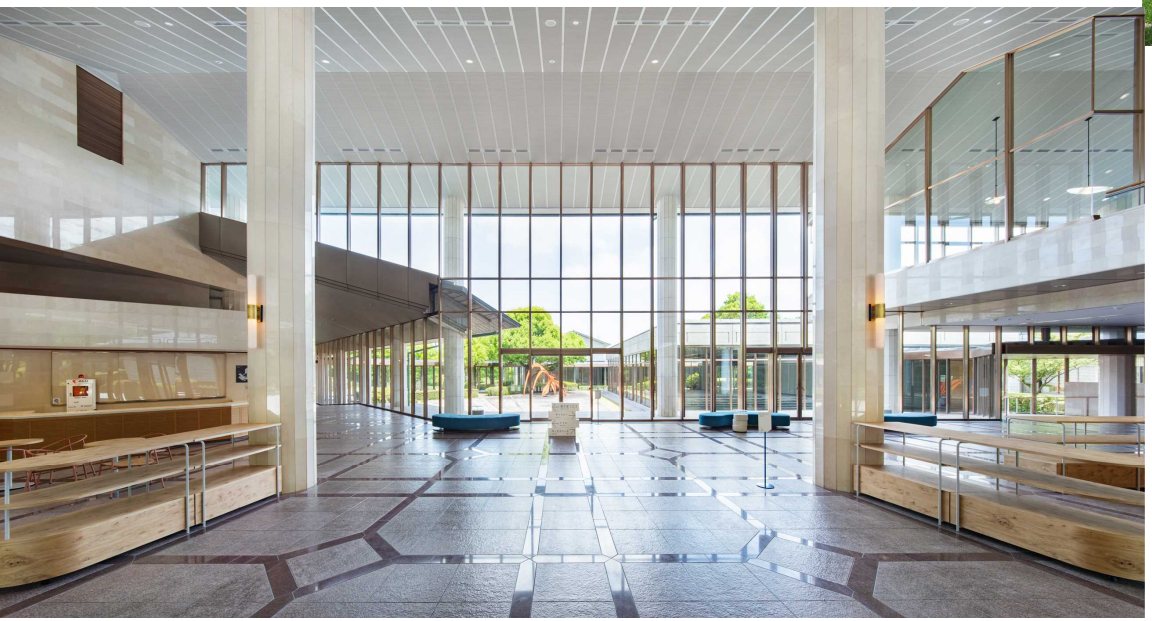
資料３

滋賀県立美術館の現状と課題の整理

令和5年（2023年）7月3日
美術館魅力向上検討部会　第１回会議



Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

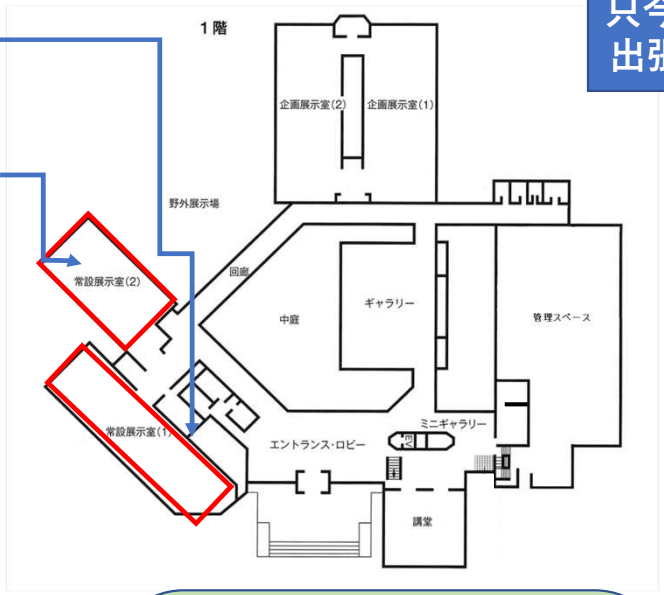
現状・課題整理①　～コレクションの活用～

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

◆収集方針
＜開館以来＞
① 日本美術院を中心とした近代日本画
② 滋賀県ゆかりの美術・工芸等
③ 戦後アメリカと日本の現代美術
＜2015年度から＞
④ アール・ブリュット
＜2021年度から＞
⑤ 芸術文化の多様性を確認できるような作品

＜現状＞
・開館時から展示面積は変わっていない。
・収集方針①、②で１室（509㎡）、③～⑤で１室（360㎡）を使用している。
・③と④で同じ展示室を使用しているため、展示作品数、展示方法などに制約が生じている。
・所蔵しているアメリカ美術は大型の作品が多いため、展示機会が限られている。
・他の都道府県立美術館と比較しても、展示面積（37位）や収蔵庫面積（33位）が狭隘。

＜R3再開館以降の代表作の展示状況＞
・ロスコ　　：企画展１回のみ
・スティル　：常設展１回のみ
・志村ふくみ：常設展17件、企画展14件
（所蔵作品資料数は約230件）
※コスース、クライン、セラ、フォンタナ、ルウィットなど、リニューアル後一度も展示できていない作品も多数。



＜問題意識＞
・美術史的に意義のある作品を多数所蔵しているにもかかわらず、県民をはじめ皆様に鑑賞いただく機会が少ない。（県有財産が有効活用できていない）
・展示方法に制約が生じ、満足感を提供できていない。（③と④を同時に展示→作品数が限定／③と④を分けて展示→展示期間が減少、など）
・新しいタイプの作品（体験型の作品（体験している姿を見る作品）、例：金沢21世紀美術館《スイミング・プール》）が設置（購入）できていない。

只今出張中！

「ABSTRACTION 抽象絵画の覚醒と展開」
（アーティゾン美術館　6/3～8/20）

著作権の関係により作品画像を表示していません。

マーク・ロスコ《No.28》

著作権の関係により作品画像を表示していません。

アド・ラインハート《トリプティック》

著作権の関係により作品画像を表示していません。

アーシル・ゴーキー《無題（バージニア風景）》

「ワールド・クラスルーム：現代アートの国語・算数・理科・社会」
（森美術館　4/19～9/24）

著作権の関係により作品画像を表示していません。

ジョセフ・コスース《1つと3つのシャベル》

＜トピックス＞日本財団からのアール・ブリュット作品寄贈

日本財団のアール・ブリュットコレクションについて

2010年にパリのアル・サン・ピエール美術館で、日本のアール・ブリュット作品を紹介する展覧会「アール・ブリュット・ジャポネ」が開催された。

この時の出展者は、日本各地でその才能を見出された障害のある人、独学のつくり手たちであった。当該の作品群は、日本のアール・ブリュットとしてヨーロッパで紹介された。この中には、滋賀県の福祉現場で生まれた作品も多く含まれていた。同展は、12万人を超える観客を集め、話題を呼ぶ。会期後、戻ってきた作品群の日本での巡回展なども経て、逆輸入的に、国内で日本のアール・ブリュットが注目を集めるようになっていく。

高い評価を得た作品群であり、その後の適切な保存・活用が求められたことから、当時は、こうした作品を収蔵することが可能な美術館がないという経緯もあり、日本財団がこれを担うこととなり、作品を所蔵した。

こうした作品群に齋藤陽道の写真作品を加えた、作家46人合計729件のコレクションである。

当館への受贈経緯

1．作品のさらなる保存環境の向上および活用機会の増加についての日本財団の意向

日本財団が当該作品群を所有したのは、適切な保存と活用を見越してのことである。しかしながら、財団は美術に専門的な機関ではないことから、この目的のさらなる遂行が期待できる美術館への譲渡を検討していたことから、当館に寄贈の打診があった。

2. 滋賀県立美術館のコレクション収集方針との合致

当館では、2016年にアール・ブリュット作品の収集を開始した。2022年度までに、澤田真一、小幡正雄、塔本シスコなどによる作品を含む198件を収蔵してきた。日本財団所有の729件（寄贈：659件、寄託70件）の作品群は、日本でのアール・ブリュットへの注目が集まったきっかけとなった「アール・ブリュット・ジャポネ」展に出品されたものであり、量、質ともに申し分なく、当館の収集方針にも合致する。

以上の理由から、当該作品群は、「アール・ブリュット作品の収集」という当館の独自性をより強固に明確化させるものであり、充実したコレクションの形成に資するものと考えられるため、2023年６月28日～29日に収集審査部会を開催した。審議の結果、当館のコレクションとすることが相当と認められたため、正式に日本財団からの寄贈を受けることとなった。（2023年７月を予定）

主な受贈作品

著作権の関係により作品画像を表示していません。

岩崎司《無題》 不詳

著作権の関係により作品画像を表示していません。

戸來貴規《日記》 2006年

著作権の関係により作品画像を表示していません。

石野敬祐《女の子》 2009年

著作権の関係により作品画像を表示していません。

舛次崇《ペンチとドライバーとノコギリとパンチ》 2006年

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

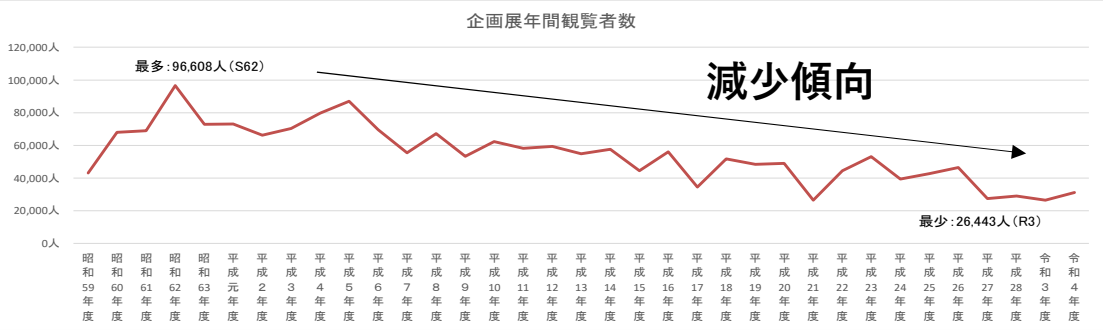
＜トピックス＞県美のプレゼンスが低下している！？

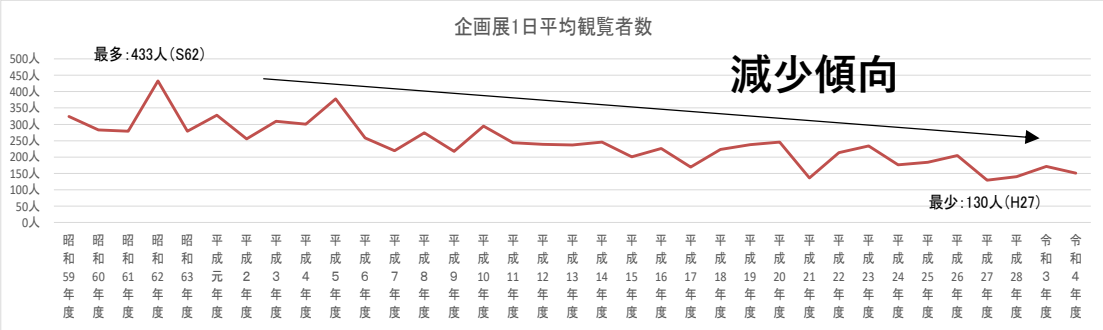
Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

ライバル
続々出現！

＜県内＞MIHOミュージアム（1997年開館）、佐川美術館（1998年開館）
＜関西公立＞兵庫県立美術館（2002年開館）、国立国際美術館（2004年移転開館）、京都市京セラ美術館（2020年リニューアル）、大阪中之島美術館（2023年開館）
＜関西私立＞逸翁美術館（2010年リニューアル）、あべのハルカス美術館（2014年開館）中之島香雪美術館（2018年開館）、福田美術館（2019年開館）、藤田美術館（2022年リニューアル）

展覧会経費は横ばいであるが、企画展の観覧者数は減少傾向にある。企画力、広報力が低下しているのか。
それとも、、、





企画展総観覧者数ベスト５

展覧会名	開催日数	観覧者数
ボロフスキー展（1987年）	42日	26,454人
ロバート・メイプルソープ展（1993年）	38日	25,089人
イサム・ノグチ－世界につながる彫刻－展（2006年）	63日	23,619人
開館15周年記念　パリ市近代美術館展（1999年）	32日	22,567人
鏑木清方展（1993年）	32日	21,632人

企画展１日平均観覧者数ベスト５

展覧会名	開催日数	総観覧者数	１日平均
開館記念　小倉遊亀回顧展（1984年）	26日	19,235人	739人
魅惑の西洋絵画展（1988年）	26日	18,465人	710人
開館15周年記念　パリ市近代美術館展（1999年）	32日	22,567人	705人
鏑木清方展（1993年）	32日	21,632人	676人
白洲正子「神と仏、そして祈り」展（2010年）	30日	20,128人	670人

企画展１日平均観覧者数ワースト５

展覧会名	開催日数	総観覧者数	１日平均
ドローイングにみる英国現代彫刻展（1984年）	19日	1,076人	56人
石と植物（2023年）	51日	3,256人	63人
柳宗悦展－暮らしへの眼差し－（2013年）	38日	2,516人	66人
時と風景－未来をつなぐコレクション（2016年）	56日	3,713人	66人
魅力再発見！“秘蔵”コレクションとの遭遇（2015年）	33日	2,317人	70人

現状・課題整理②　～既存施設の老朽化～

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

1983年の竣工以来約40年が経過し、抜本的な改修や設備更新が急務

＜主な課題＞
- 空調設備老朽化（空調機（AHU）、配管、冷温水発生器等）
- 雨水逆流対策（地下の雨水排水管逆流）
- 屋内外照明設備LED化
- 来館者EV、自動ドア等更新
- 回廊等結露対策
- 彫刻の庭およびコールダーの庭への出入口に風除室がない

※参考：これまでの主な改修内容

2023年(予定)	外壁、作品EV、冷温水ポンプ
2020年	屋根防水改修、展示室ガス消火、トイレ、ロビー耐震、展示 室LED化、冷却塔 ロビー周辺をウェルカムゾーンと位置づけ、キッズスペース、授乳室、ラボ等を整備
2009年	自家発電設備、冷温水発生器
2004年	中央監視装置

現状・課題整理③　～利用者利便性～

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

（1）アクセス

①公共交通
・最寄りの駅は、JR東海道本線（琵琶湖線）の瀬田駅。普通列車のみ停車。京都駅から最短17分程度。大阪駅から最短55分程度。
・JR瀬田駅から最寄りのバス停まで10分程度。バスの運行間隔は平日は15分に１本、休日は30分に１本程度。現金のみ利用可能。（交通系ICは利用不可）
・最寄りのバス停（文化ゾーン前、県立図書館・美術館前）から徒歩５分程度。美術館までの園路が傾斜していることに加え、凹凸のある個所もある。
②自家用車
・新名神高速道路草津田上インターから約５分。
・美術館専用の駐車場はないが、びわこ文化公園の駐車場（無料・３か所）を利用可能。いずれからも徒歩約５分。歩行が難しい方がいらっしゃる場合などは、美術館側の駐車スペース（４台）あり。東駐車場からはおおむね平坦であるが、北・西駐車場からは勾配あり。また、凹凸のある個所もある。

（2）案内表示

	JR瀬田駅（最寄り駅）	文化ゾーン前（バス停）	県立図書館美術館前（バス停）	駐車場（東）	駐車場（西）	駐車場（北）	その他、共通事項
現状と課題	・改札前に展覧会のポスターを掲示。 ・どのバス停からどの系統に乗車すればよいのか分かりにくい。 ・バス停のバナーは、リニューアル時から更新できていない。	・企画展の看板、チラシを掲出。 ・バス停で降りても、美術館に来たという気持ちの高揚が少ない。 ・まずどこへ向かえばよいのか分かりにくい。 ・園内の分岐点には、適宜案内表示あり。 ・復路のバス停には屋根や椅子が設置。	・企画展の看板はあるが、降りてすぐに視認できない可能性がある。 ・バス停で降りても、美術館に来たという気持ちの高揚が少ない。 ・まずどこへ向かえばよいのか分かりにくい。 ・園内の分岐点には、適宜案内表示あり。 ・バス停に屋根がない。	・県道からの交差点の表示が視認しにくい。 ・すぐに東駐車場と認識できない可能性がある。 ・身障者の方などは園内に進入いただけるが、案内が分かりにくい。 ・園内に進入できても、美術館玄関前の駐車場の案内がない。	・県道の片側車線からしか入場できない。 ・すぐに西駐車場と認識できない可能性がある。 ・駐車場に隣接する原っぱに公園のマップはあるが、山肌が見えるだけで美術館が視認できない。	・県道の両車線から入場できる。 ・美術館へは複数のルートがあり、基本的に園内の分岐点には案内表示があるが、彫刻の路には何も表示がなく、また、庭園の池の手前には案内表示があるが、その先の分岐には案内表示がない。	・美術館に接近しても、何の展覧会をやっているかなど、情報が表示されていない。 ・帰路において、美術館を出て、まずどこへ向かったらよいのか分かりにくい。（美術館前に案内表示、公園のマップなどがない） ・駐輪場の案内がほとんどない。 ・近代美術館の表示が残っている箇所がある。

（3）キャッシュレス決済化

・現状、当館の決済方法は現金のみ。今年度、県庁全体でキャッシュレス化の進め方について議論される予定であり、その方向性に沿いキャッシュレス決済を導入予定。

館名（県立館）	現金以外の利用可能な決済手段	館名（近隣参考館）	現金以外の利用可能な決済手段
琵琶湖博物館	クレジット（V,M,JA）、交通系、楽天Edy、WAON、nanaco、各種QR、（WEBチケット）	京都市京セラ美術館	クレジット（V,M,J）、交通系、楽天Edy、WAON、nanaco、各種QR、（WEBチケット）
安土城考古博物館	クレジット（V,M,J,AE,銀聯）、交通系、楽天Edy、WAON、iD	大阪中之島美術館	クレジット（V,M,J,AE,DC,DISCOVER）、（WEBチケット）
陶芸の森	現金のみ	兵庫県立美術館	クレジット（V,M,J,AE,DC,DISCOVER,銀聯）、交通系、iD、Apple Pay、QUICpay

現状・課題整理④　～野外空間の活用～

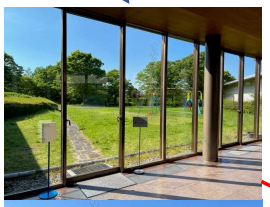
Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

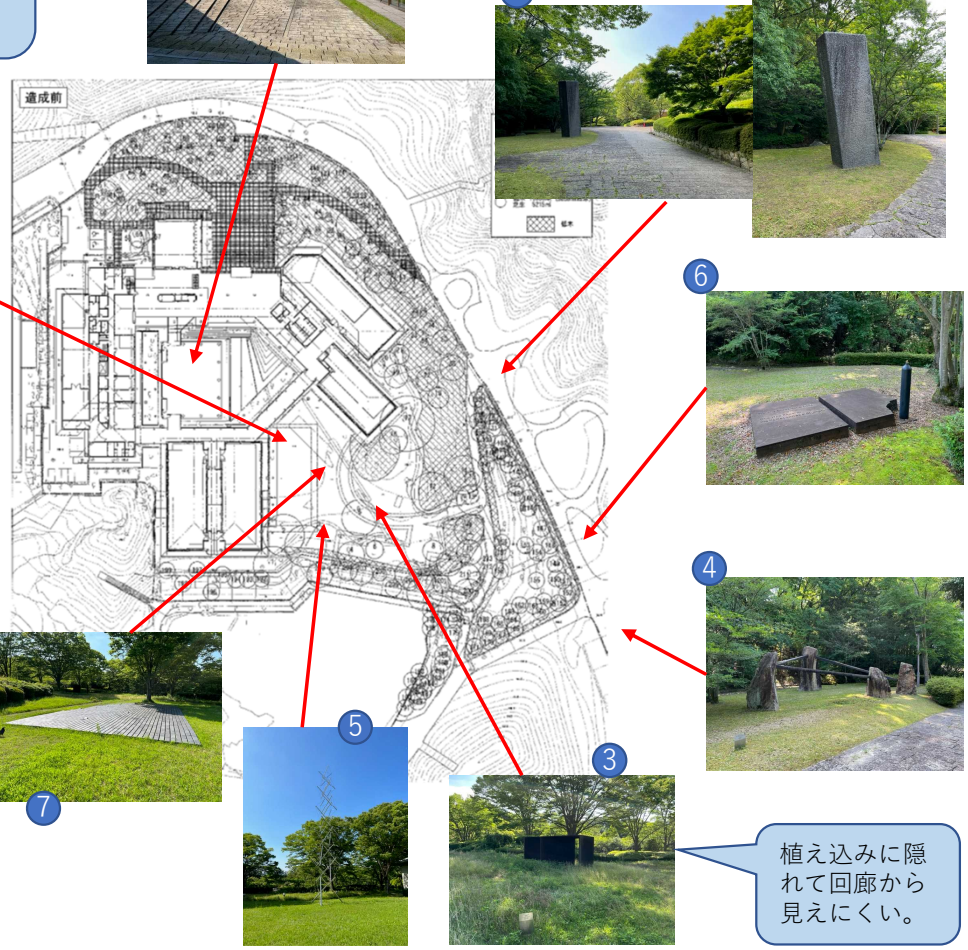
＜美術館建設当初の理念＞
・自然と人間のふれあいの中で人々に安らぎをあたえようという人間尊重の基本姿勢を貫き、恵まれた自然の地形や緑をできるだけ生かし、他に類を見ない自然美を誇る美術館とする。

・建設予定地は緑と自然に恵まれた丘陵地であり、この地形上の長所を生かした屋外展示場を設け、美術活動と他の文化、芸術活動をつなぐ実験的な試みの場として使用するなど多目的利用を考えていく。

＜美術館を取り巻く屋外空間＞
・文化、芸術、医療、福祉、教育、研究、レクリエーションなどに関する多様な施設が集積するびわこ文化公園都市に立地。
・1979年に策定された「びわこ文化公園都市構想」の「芸術、教養の文化クラスター」に位置づけられたびわこ文化公園（約43ha）に立地し、県立図書館や県埋蔵文化財センターが近接。
・2023年度から、びわこ文化公園にPark-PFI制度が導入され、公園内にカフェやワーケーションベンチなどが新設。
・美術館の敷地内（中庭、彫刻の庭）や隣接する彫刻の路に、８点の屋外彫刻を設置。

作品を近くで見てほしいが、風除室がないため広くオープンにできない。（出入口に監視員を配置し都度開閉）





中庭が芝生ではなく石畳のため、冷たい印象を受ける。

植え込みに隠れて回廊から見えにくい。

	作品名	作者	収蔵年度	設置場所
①	フラミンゴ	アレクサンダー・コールダー	1982	コールダーの庭
②	夏至の日のランドマーク	山口　牧生	1985	彫刻の路
③	無題	ドナルド・ジャッド	1987	彫刻の庭
④	置・傾／トライアングル	植松　奎二	1987	彫刻の路
⑤	ニードル・タワー	ケネス・スネルソン	1990	彫刻の庭
⑥	酸素／滋賀	村岡　三郎	1993	彫刻の路
⑦	BIWAKO’84	速水　史朗	1997	彫刻の庭
⑧	こうさするこうえん	井上　裕加里	借用中	彫刻の庭

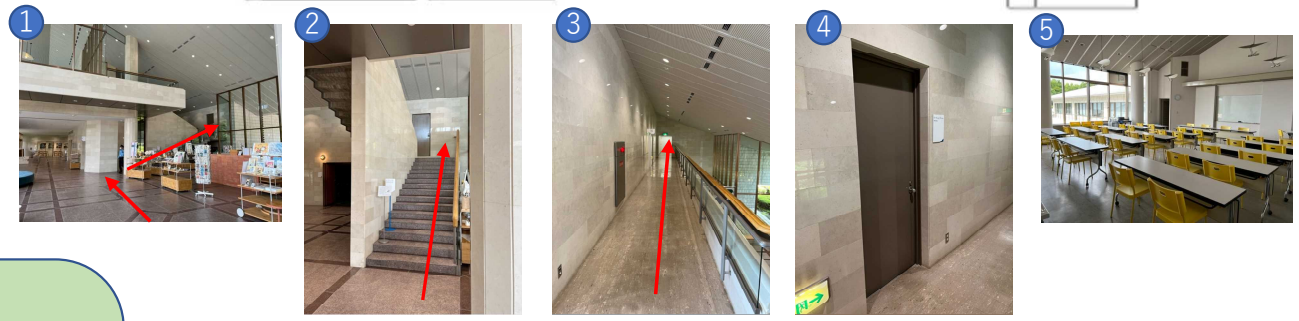
現状・課題整理⑤　～教育交流事業～

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

＜これまでの取組＞
・展覧会関連イベント（講演会、ギャラリートークなど）【1986～】
・学校団体鑑賞【1987～】
・ワークショップ（主に幼小対象）【1993～】※大人対象【1995～】
・学校出前授業プログラム【2000～】
　※学習指導要領（2002施行・小中）で図工・美術科に「鑑賞」の項目が設けられ、美術館を利用した学習活動が求められる以前から実施
・たいけんびじゅつかん（親子対象）【2002～】
・地域出前プログラム（アウトリーチ活動）【2013～】
・その他（ロビーコンサート、教員向け研修会など）

＜今後の取組の方向性＞
・学校との連携強化（団体鑑賞の受入れ、遠隔地や特別支援学校へのアプローチ）
・これまでの各種取組でカバーできていない層の子どもたちに、美術館と出会う場をつくるため、2023年度からフリースクールや院内学級にもアプローチ
・2024年度から「対話鑑賞」を本格実施（2023年度は試行的に実施）

ワークショップルームまでの動線



＜ソフト面の現状と課題＞
・それぞれの教育交流事業（たいけんびじゅつかんなど）が単発のイベントとなっており、プログラム化が不十分。
・また、アーカイブ化も不十分なため、その場に参加した方しか体験や学びを共有できていない。
・アウトリーチ活動を積極的に実施しているが、その活動が見えにくい。
・教育交流事業を広く発信するとともに、そこからの学びを来館者と共有するために、一過性の取組で終わらせず、長く見せていくための仕掛けを考える必要がある。
・利用者からのニーズが多様化する中、限られたリソース（人員、財源等）でどう応えていけばよいか。

＜ハード面の現状と課題＞
・ワークショップルームが物理的に展示空間から離れている（動線も異なる）ため、そこでの活動が鑑賞の妨げにならないというメリットがある一方で、ワークショップルームの利用を目的としない利用者には、その存在が認知されにくい。
・また、ボランティアの活動スペースが閉鎖的であり、その活動の様子が認知されにくい。
・教育交流事業を広く認知いただくために、来館者が取組の様子や成果などに自然に（意識せずに）触れられる仕掛け（ワークショップルームの位置・動線など）を考える必要がある。

現状・課題整理⑥　～多様な鑑賞者への対応～

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

現状と課題

障害のある方

・エントランス前（２台）、通用口前（２台）に駐車することが可能であるが、台数が少なく、案内表示がないため分かりにくい。
・バス停や駐車場からのアプローチが平坦ではない。
・利用者支援が薄い。（音声ガイドがないなど）
・多目的トイレ（車椅子、オストメイト対応）を設置。

日本語を母語としていない方

・HPが日本語のみ。
・外国語版の施設紹介（館内案内）パンフレットがない。（そもそも日本語のパンフレットがない）
・利用者支援が薄い。（音声ガイドがないなど）
・多言語対応できる人材の不足。

高齢の方

・バス停や駐車場からのアプローチが平坦ではない。
・車いす（２台）の貸出。
・キャプションの文字が小さく、判読が難しい。

親子連れ

・リニューアルの際に、キッズスペースや授乳室、ファミリートイレを新設し、利用者から好評をいただいているが、周知や利用促進が十分とはいえない。
※現状託児機能はないが、令和５年度に託児を試験的に実施する予定
・ベビーカー（２台）の貸出。

20分プロジェクト【検討中】

（１）問題意識
リニューアル開館時に、誰もが気軽に訪れることのできるリビングルームのような空間を掲げたが、現状は、左記のように一定のバリアが存在している。

（２）概要
鑑賞にあたってサポートが必要な方から申出があった場合、館の職員が20分間、来館者の鑑賞支援を行う。

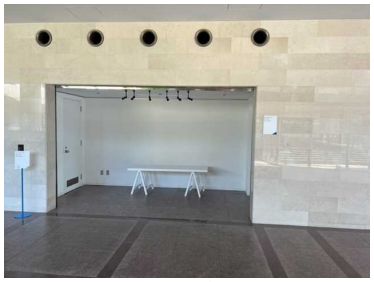
（３）課題
・対応する来館者の属性の定義。（申出があった場合にすべて対応することは難しいため、一定の線引きが必要）
・基本的にすべての職員（学芸員、事務職の別を問わない）が対応できるようするためのマニュアル作成。
・常時対応可能な体制づくり。（いったん始めると後戻りが難しいと思われるため）

（４）展開
・マニュアル作成にあたっては、ネガティブにならないよう留意する。
・2023年10月７日から11月17日まで開催する「“みかた”の多い美術館」で試行的に実施する予定。
・最終的には、企画展だけではなく、常設展で、も実施する。

現状・課題整理⑦　～ギャラリーの活用～

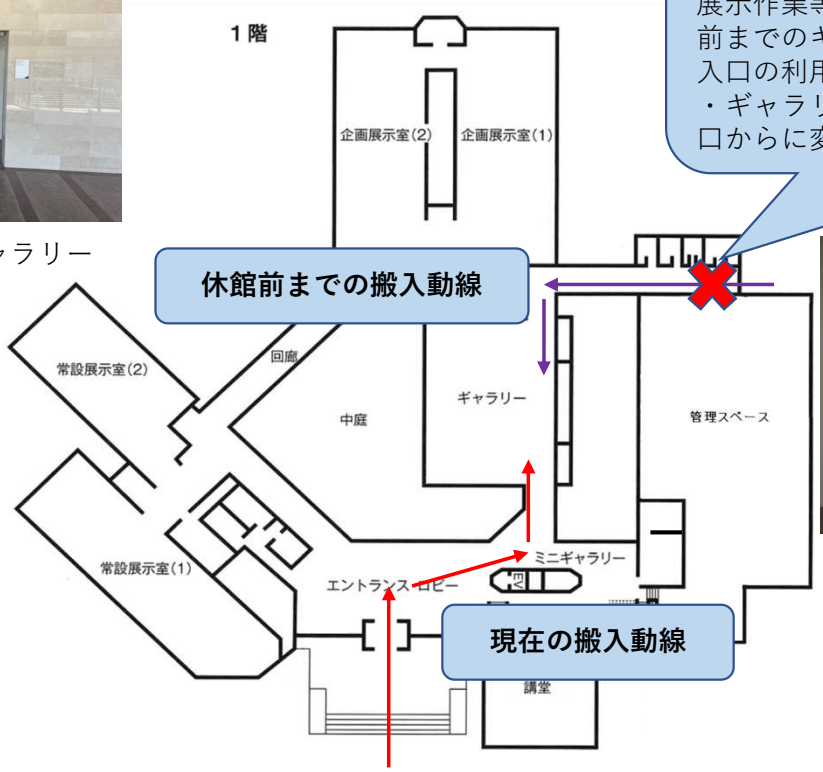
Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

ギャラリー

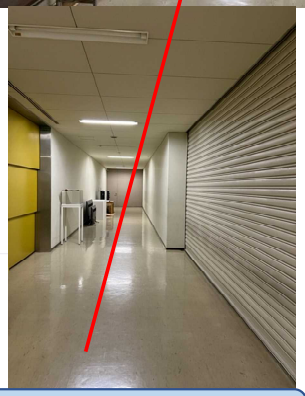


ポップアップギャラリー

【再開館後】
・美術館とギャラリーの搬入動線がぶつかり、美術館の展示作業等に支障をきたすおそれがあることから、休館前までのギャラリーの搬入動線およびギャラリー用の搬入口の利用を停止。
・ギャラリーの搬入動線を、通常の来館者と同じ正面入口からに変更。



ギャラリー用の搬入口



美術館の搬入動線

・ギャラリーの壁面がガラス張りで使い勝手が悪いとの声がある。採光には優れた空間であるが、実際に使用される際は、可動壁を設置されることが多い。

・面積（478㎡）が狭いため、滋賀県美術展覧会（県展）を二期に分けて開催する必要があり、美術関係団体から、増床の強い要望がある。

・休館前は年間の稼働率が高く、予約が取りづらい状況にあったが、再開館後は、稼働率が大きく落ち込んでいる。

※上段：年度／下段：年度間稼働日数	2013 （266日）	2014 （285日）	2015 （268日）	2016 （273日）	2017～ 2020	2021 （183日）	2022 （296日）
ギャラリー ※上段：稼働日数／下段：稼働率	211日 （79％）	253日 （89％）	181日 （68％）	247日 （90％）	休館	12日 （７％）	102日 （34％）
ポップアップギャラリー （2016まではミニギャラリー）	12日	６日	18日	0日	-	25日	65日

現状・課題整理⑧　～文化観光・連携拠点～

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

＜市民＞

①県内
・遠隔地域（湖西、湖北）の方々に、“わたしの県の美術館”と感じてもらうためにはどのような取組が必要か。
②県外
・近隣に魅力的な美術館が多くある中、来館を促すために、どのような仕掛けづくりを行えばよいか。

＜地域＞

・地域の方々にとって、“わたしの町の美術館”と感じてもらうためにはどのような取組が必要か。
・美術館は地域の魅力向上やまちづくりにどうコミットしていくべきか。

＜ミュージアム＞

①県内
・美の魅力発信５館ネットワーク（県立施設（美術館、琵琶湖文化館、安土城考古博物館、琵琶湖博物館、陶芸の森））を構築しているが、今後どのように展開していけばよいか。
・県内美術系ミュージアム（佐川美術館、MIHOミュージアム）との連携により周遊観光につなげることはできないか（←両館に対し当館と連携することのメリットを示すことができるか）。
②県外
・同種のコレクション（例えばアール・ブリュット）を軸としている美術館でネットワークを構築し、文化観光の足掛かりにすることはできないか。

＜大学＞

・キャンパスメンバーズの意義を伝え切れていないのではないか（実績ゼロ）。
・研究室やサークル、授業単位などでの成果発表の場としての美術館（ギャラリー）の活用可能性を発信（営業）できていないのではないか（→ギャラリー利用率の低迷）。
・学生が訪れたくなるような美術館の仕掛けづくりが不十分ではないか（徒歩圏内で訪れることのできる大学があるにもかかわらず、存在が意識されていないのではないか）。

＜学校（大学以外）＞

・引き続き、学校団体鑑賞を積極的に周知することに加え、高校の美術科や美術部などにも個別にアプローチしていく必要があるのではないか。
・子どもたちが美術館に行きたいと思うためには、どのような仕掛けづくりを講じればよいか。

＜びわこ文化公園・びわこ文化公園都市＞

・公園利用者や図書館利用者の美術館への来館を促す仕掛けづくりが不十分ではないか。
・公園内の県立図書館、県埋蔵文化財センター、西武造園（Park-PFI受託者）と具体的にどのように連携すればよいか。
・公園都市に点在する教育機関や研究機関、医療機関と、どのように連携すればよいか。

＜企業＞

・美術館と連携することのメリット（社内研修での活用、ギャラリーの優先使用等）を伝え切れていないのではないか。
・企業側のメリットを意識した積極的なファンドレイジングが必要ではないか。

現状・課題整理⑨　～デジタル・アーカイブ化～

所蔵作品管理公開システム

・早稲田システム開発株式会社に委託
（2020年度から）
・年間予算約40万円
・会計年度任用職員（アーカイブ担当）を配置
（2023年度から１名）

①令和元年以降に受け入れた作品の撮影や登録ができていない。

②所蔵作品・作家の解説テキストの登録・一括管理ができていない。

③関係者（著作権者等）の情報の登録・一括管理ができていない。

⇒それぞれの情報が個々の学芸員の手元にあるため、情報資源の組織化ができていない。

システム以外の課題・・・

・作家ファイル（所蔵作家に関する記事等を作家ごとにまとめたもの）が未作成

⇒現状は、新聞記事や雑誌掲載記事などは、ひとつのファイル（現物）にまとめて保存されている。

⇒データ化はされていない。

・デジタル・アーカイブの活用

⇒現状は、ホームページで作品の情報（作品名、作家名、画像、種別、領域、制作年、寸法、材質、技法）を公開している。
※作品によって公開している情報は異なる。
※作品以外の資料（手紙など）は公開できていない。

⇒受動的な公開にとどまり、積極的な活用・発信には至っていない。

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

（参考）目指していきたい方向性

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

（1）リール・メトロポール近代美術現代美術アール・ブリュット美術館（フランス）

- 当初は近現代美術のコレクションだけであったが、1999年にアラシン・コレクションの３千点あまりのアール・ブリュット作品が寄贈されたことを契機として、2006年から2010年にかけて建物の増改築が行われ、アール・ブリュット専用の展示室（白が基調で、外光も取り込む）を設置。再開館に際して、美術館の名称に「アール・ブリュット」の名が加えられた。
- 周辺に大学のある郊外の地区に位置。駅から本数の少ないバスで行く自然豊かな公園の中に立地。周りに彫刻が点在する低層の建物。

（2）ルイジアナ近代美術館（デンマーク）

- 創立者の理念は「みんなの近代美術館」。駅から住宅地と森を抜けた先に立地。自然景観（庭園）と一体化した美術館。
- ジャコメッティの「歩く男」と池。芝生の庭にコルダーのモビールアート。彫刻公園にムーアの彫刻。
- 北棟、南棟、西棟、東棟が回廊でゆるやかに接続。（東棟等と南棟は地下通路）

（3）ムゼウム・インゼル・ホンブロイヒ（ドイツ）

- 「芸術と自然の並置」という方針のもとに設立。一帯がいくつもの芸術関連施設（美術館、アトリエ、研究所等）で構成。「芸術の孤島」。
- 自然のままの広大な敷地にパビリオンが点在。回遊しながら鑑賞
- なお、作品との対話を目的とし、キャプションや配布資料はほとんどない。

（4）アート・ギャラリー・オブ・オンタリオ（カナダ）

- 2008年の大幅な増改築（設計はゲーリー）を「Transformation AGO」プロジェクトとして実現。
- これにより、あらゆる年齢層を対象とした教育プログラムを、館内のいたるところに新たにデザイン。
- また、作家アーカイブとダイナミックにリンクした作品展示を実現。
- 2011年には「Weston Family Learning Centre」をオープン。600㎡の「スタジオ」と呼ばれる多目的スペースは地下から吹き抜けになっており、そこでの活動の様子や結果を多方向から見ることができる。

（参考）ＩＣＯＭの博物館定義の変遷

Shiga Museum of Art
滋賀県立美術館

ICOMウィーン大会（2007年）で採択

•博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する公衆に開かれた非営利の常設機関である。

•（出典：博物館法令研究会編著,『改正博物館法詳説・Q&Aー地域に開かれたミュージアムをめざして』, 水曜社, 2023年，26ページ）

•（出典：ICOM日本員会ホームページ,「https://icomjapan.org/journal/2020/09/03/p-1315/」,（2023/6/28最終閲覧））

ICOM京都大会（2019年）提示案　※採択見送り

•博物館は、過去と未来に関する批評的な対話のための、民主化を促し、包摂的で、様々な声に耳を傾ける空間である。博物館は、現在起こっている紛争や課題を認識し、それらを考察しつつ、社会のために託された資料や標本を保管し、未来の世代のために多様な記憶を保全し、すべての人々に遺産に対する平等 な権利と平等なアクセスを保証する。
博物館は、営利を目的としない。博物館は、開かれた公明正大な存在であり、人間としての尊厳と社会正義、世界的な平等と地球全体の幸福に貢献することを目的に、多様なコミュニティと手を携えて収集、保存、研究、解釈、展示並びに世界についての理解を高めるための活動を行う。

•（出典：ICOM日本員会ホームページ,「https://icomjapan.org/journal/2020/09/03/p-1315/」,（2023/6/28最終閲覧））

ICOMプラハ大会で採択（2022年）

•博物館は、有形及び無形の遺産を研究、収集、保存、解釈、展示する、社会のための非営利の常設機関である。博物館は一般に公開され、誰もが利用でき、包摂的であって、多様性と持続可能性を育む。倫理的かつ専門性をもってコミュニケーションを図り、コミュニティの参加とともに博物館は活動し、教育、愉しみ、省察と知識共有のための様々な経験を提供する。

•（出典：ICOM日本員会ホームページ,「https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/」,（2023/6/28最終閲覧））